

聖日礼拝説教要旨 【2018年3月25日】

「世の終わりまで」-マタイによる福音書講解説教 112-

ダニエル書 7章 13節～14節
マタイによる福音書 28章 16節～20節

説教 岡村 恒 牧師

「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」。(マタイによる福音書28章20節) 主イエスの力強い約束の言葉が響きます。私たちがこの聖堂で聴き続けてきたのは福音です。悲しみ、絶望し、何の喜びも見いだせない者が、本当の福音に触れると躍り上がって歩き出す。これが福音の力です。

今日は棕櫚の聖日、主イエスが十字架に磔になる直前の日曜日に、エルサレムに入ってこられた出来事を思い出す日です。人々は歓呼の声を上げて主イエスを出迎えました。地上を歩まれた主イエスの生涯の中で、最も華々しい瞬間だったかもしれません。この後、天から降った神の独り子が、ここから降って行きます。十字架に高く上げられますが、死体となって下ろされ、墓に行き、陰府にまで降ります。

本当なら棕櫚の聖日の今日、主の受難の意味を聴くはずでしたが、2013年11月から読み続けてきたマタイによる福音書が、私たちに語る福音とは何かを、一緒に確認をして読み終えたいと思いました。マタイによる福音書は長い系図から始まります。地上の人間の歴史を記すことで、私たちの救いが得体の知れない力によって与えられるものではないことを明確に示します。小さな私たち1人1人の名がそこに記されている、そう言って良い系図であります。

主イエスは、神に愛され、神に満足を与えられ、神の国に入るといふ約束をはっきりと丁寧に、私たちに語ってくださるために説教をなさいました。主イエスと無関係な人間など、この地上に1人もいません。神の救いの約束は全ての人の罪と汚れを洗い流す福音です。

死人の中から復活なされた主イエスにお会いした弟子たちはひれ伏して拜んだ、しかし疑う者もいた、と聖書は記します。これが私たちの本質です。聖霊が注がれなければ、誰もイエスは主であると告白することはできないのです。

私たちの究極の敵は死です。多くの人が死を恐れ、死に備えて生きます。しかし、主イエスはこの最後の敵を滅ぼして、復活なされたお方です。全ての者の上に立つ権威を、私は神から与えられたとおっしゃったのは主イエスです。教会は信仰者を主イエスから引き離すことなどできないと、繰り返し告白し続けてきました。

私たちが、その力を持って、死と滅びから解放してくださったからです。

私たちは今日、1つのことを握り締めて歩み続けることができます。主イエスが、今も確かに生きて、私たち1人1人のために執り成し、神の家に場所を用意し、そこに迎え入れて下さるといふ約束です。主イエスはインマヌエル(神、我らとともにいます)という名前で呼ばれたお方です。復活をされた後、天上に上げられた主は、聖霊を注ぐことによって、どこに居る人とも一緒に居ることができるようになりました。

2000年7月から17年9ヶ月、ここで説教者として用いられてきました。700回余り、この講壇で御言葉を一緒に味わってきました。今日、私は最後の説教を終えて、大阪を去ります。しかし、私たちは主イエス・キリストに結び合わされた者同士として、深く繋がったままで、終わりの日、神の前に引き上げられて再会をし、食卓を囲むこととなります。

受難節、この悔い改めの時、私たちが祈る祈りの言葉にはいつも特徴があります。私たちが憐れんでください、赦してください、創り変えてくださいという祈りの後、『主よ、来てください』と代々のキリスト者は祈ってきました。

この祈りの中で、パウロに倣って終わりの挨拶をしたいと思います。《ミレトの別れ》といって、聖書の中で最も美しいと言われる場面の1つで語られた言葉です。キリストの使徒パウロが最後の旅をしてエルサレムに帰り、死が迫っている事を知って、エペソの長老たちと別れをする場面の言葉です。

「今わたしは、主とその恵みの言とに、あなたがたをゆだねる。御言には、あなたがたの徳をたて、聖別されたすべての人々と共に、御国をつがせる力がある。」(使徒行伝20章32節)

この確信を持って、一緒に主の再臨を待ち望みたいと思います。主の約束は、昨日も今日も、いつまでも変わることはありません。

(記 説教要約奉仕者)